



モバイルテクノロジー賞・審査委員長特別賞

株式会社みずほ銀行

スマホによるキャッシュレス決済

Profile

株式会社みずほ銀行  
事業内容：銀行業  
URL：https://www.mizuho.co.jp/

# スマホタッチで銀行口座直結の決済 利便性で早くも100万件の実績

## DATA

活用領域・解決する課題	・スマホ上での銀行口座直結型決済の実現 ・キャッシュレス化、カードレス化の推進
テクノロジー・デバイスキーワード	スマホアプリ、FeliCa、キャッシュレス決済・チャージ、API、OAuth2.0

「2025年に40%」との目標が政府から発表され活気づくキャッシュレス決済。

クレジットカード以外に“スマホ決済”やICカードによる非接触型などモバイル性の高い方法が登場しているが、スマホアプリはアプリ立ち上げの手間を要し、非接触型ICはチャージを経る必要がある。

さらなる利便性への要望——例えば「銀行口座と直結した決済で、ちょっとした買い物の支払いもチェックできればいいのに」といったニーズに応えるサービスを、みずほ銀行がリリースした。

同社がMCPC awardで8年連続受賞を達成することとなったスマホ向けのFeliCa対応ウォレットアプリ「みずほWallet」である。

同サービスでは、Android端末向けにジェーシービーおよび大日本印刷と共同開発した「スマートデビット」、iPhone・AppleWatch向けには東日本旅客鉄道(JR東日本)と共同開発した「Mizuho Suica」を組み合わせることで、スマホ上で銀行口座から直接デビット決済やチャージを行うことができる。

スマホを使った非接触型のデビット決済は世界初。また、現金やクレ

ジットを用いない交通系電子マネーへの即時チャージも国内初の取り組みである。

個人マーケティング推進部デジタルチャネル開発チーム参事役の西本聡氏は、「お客様の利便性向上を図るため、振込・振替や残高照会が可能な従来からのスマホアプリに決済機能を追加することを決め、その具体的な形式として『お客様が普段使われているICカードをバーチャル化して取り込めないだろうか』と考えました」と、出発点を語る。

### 申込はペーパーレスで バーチャルカードを即時発行

「みずほWallet for Android」と「スマートデビット」は2018年3月22日、「みずほWallet for iOS」と「Mizuho Suica」は同年8月1日からサービス提供が開始された。

両方に共通する特徴として、①スマホだけで利用可能、②紙による申込不要で即時に登録・利用が可能、③銀行口座から直接引き落とし、もしくはチャージ、④さまざまな場所(コンビニ、スーパー、ファミレス、交通など)で利用可能、⑤スマホをかざすだけで簡単支払い、の5つが挙げられる。「キャッシュレスに加えてカードレ

図1 スマホで「ピピッ」とカードレス決済「みずほWallet」



ス、ペーパーレスも実現したサービスが最大の特徴です」と西本氏は強調する。

⑤は、みずほWalletを起動させることなく端末がスリープ状態でも決済を可能にしている。個人マーケティング推進部デジタルチャネル開発チーム担当調査役の真田孝太氏は、「おサイフケータイおよびApplePayをプラットフォームに利用しているため、スマホ本体のFeliCaチップだけで決済できます。みずほWalletは利用者の認証やスマホ上でのバーチャルカー



個人マーケティング推進部  
デジタルチャネル開発チーム  
参事役  
西本聡 氏(左)  
個人マーケティング推進部  
デジタルチャネル開発チーム  
担当調査役  
山口王史 氏(中央)  
個人マーケティング推進部  
デジタルチャネル開発チーム  
担当調査役  
真田孝太 氏(右)

ド発行、利用管理などを行っています」と、その仕組みを説明する。

両サービスとも、スマホに「みずほWallet」をインストールし、みずほ銀行口座の情報を入力すれば、その場でバーチャルカードが発行される。手数料や年会費は一切かからない。

Android端末は、全国の「QUIC Pay+」加盟店でデビット決済を利用可能。スマホ上で預金残高範囲内の利用なので使い過ぎも防げる。

iPhone・AppleWatchでは、画面上で1000円単位、上限2万円の範囲で金額を入力すれば、口座からの引き落としでチャージされ、全国の交通系ICカードエリアにおける鉄道・バスの利用、各交通系電子マネーが使える店舗などでの支払いが可能になる。

### API活用で素早い開発 高セキュリティ・信頼性も確保

ウォレットアプリの構想は2年ほど前に浮上し、システム開発には約1年をかけた。「当社外に構築されているJCBデビットやSuicaの既存システムとスマホ端末側および当社内のシステムを連携させる必要があったため、その接続作業が一番大変でした」と、個人マーケティング推進部デジタルチャネル開発チーム担当調査役の山口王史氏は振り返る。

それでも1年ほどで開発を完了できたのは、前年のMCPC awardで優秀賞を受賞した「モバイル金融API」を有効活用したことが大きい。社外向けに公開している同APIを残高・利用明

細照合に利用したほか、本人確認やリアルタイムな口座振替においては従来からある法人向け(B2C)プロダクトを社内側システムの開発に用いたことで大幅に手間を軽減できたのである。

また、独自のAPIゲートウェイにより、クレジットカードの追加など今後の拡張性も持たせることができたという。

しかも、このAPIでは「OAuth2.0」というRFCで規定された認証方式を採用したことにより、利用者がID・パスワードを外部企業に預けずにサービスを利用できる確かなセキュリティを実現している。

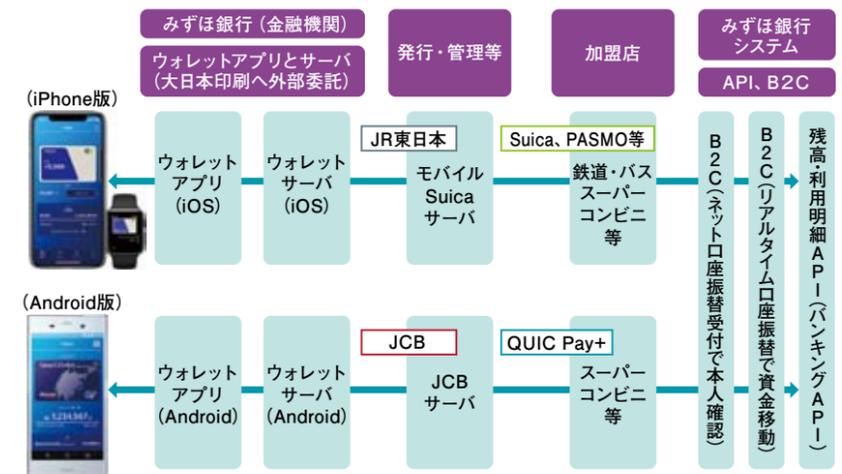
### 決済利用の大半が1000円未満 提供側にもコスト削減効果

「みずほWallet」は、2018年11月時点で両OS版を合わせて50万ダウンロードを突破し、決済利用件数は100万件に達している。利用者層は40～50代の男性が一番多く、決済金額は1000円未満が大半を占めるという。

みずほ銀行自身も現金ハンドリングコストの削減や新たな収益源の創出、ジェーシービーやJR東日本にとってもICカードの発行コスト抑制や顧客への付加価値提供などの効果を得られる。

百花繚乱の様相を示し始めたキャッシュレス決済であるが、スマートフォンから安全にワンタッチで決済できる「みずほWallet」は、その利便性から政府が推進するキャッシュレス化に貢献していくことが期待されている。西本氏は、「サービスの拡充に加えて、利用履歴などデータの利活用という面でもお客様への付加価値を提供していきたい」と、今後の展開を見据えている。

図2 「みずほWallet」のシステム概要



・みずほ銀行独自のAPIゲートウェイを利用することで、今後クレジットカードを追加するといった拡張余地も確保